

ギャンブル等依存症について考えるシンポジウム in 長崎

自覚が大切、時間をかけて

さまざまな「依存」について理解を深める「ギャンブル等依存症について考えるシンポジウム」(実行委主催、一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構・県遊技業協同組合共同助成事業)が10月2日、長崎市茂里町の長崎新聞文化

ホールで開かれました。約70人の当事者や関係者が参加し、基調講演やパネルディスカッションなどを通じて、誰もが陥る可能性がある依存に対する知識や、当事者や家族への回復支援策について理解を深めました。



依存症の当事者の体験談や、具体的な支援策などについて意見を交わしたパネルディスカッション＝長崎新聞文化ホール

- パネリスト**
- 宇土 けい氏 西脇病院精神保健福祉士
 - 森 昭子氏(仮名) ギャンブル依存の当事者
 - 坂本 優子氏(仮名) アルコール依存の当事者
 - 大野 渚氏 長崎医療センター総合診療科医師
- コーディネーター**
- 中野 朋子氏 長崎ダルク相談員



中野 朋子氏

中野 西脇病院で働いている「女性の集い」について教えてください。宇土 依存症は男性が多く、女性は体験談を話していくという声を受け、1996年に始めました。当初はアルコール依存がメインでしたが、ギャンブルや買い物依存の方も参加するようになって、テーマを「女性の生きづらさ」に変えました。アルコール、薬物、ギャンブルだけでなく、うつ病やそううつ病といった気分障害、心身症も根っこにはストレスがあります。女性の集いでは、そうした内側の部分を話します。当事者の家族も一緒に参加しているのは全国的に珍しくです。

「私たちが見た依存症の世界ー女性の立場からー」

パネルディスカッション



一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構 専務理事 廣田 卓也氏

主催者 あいさつ

当機構は前身の「全日本社会貢献団体機構」時代を含め、16年目を迎えることになります。その間、学術・文化の振興、命を大切に研究や活動、子どもの健全育成などの分野で活動する団体に対する助成、さらに2011年以降は東日本大震災をはじめ、日本各地で統廃する自然災害の復旧・復興支援に取り組む団体への助成などをしていました。

19年からは業界として喫緊の課題ともいえるパチンコ・パチスロ依存問題の予防や解決に取り組む事業・研究への助成も開始しました。特にカジノを含む統合型リゾート(IR)の誘致活動が進んでいる長崎県においては、4年前から依存問題をテーマに活動する必要性を共有してきたことで実現することができました。今後も当機構では、よりよい社会の構築に少しでも貢献・寄与できるよう取り組んでいく所存です。



宇土 けい氏



大野 渚氏

行くようになってきました。結婚して子どもができて、ずっとプレッシャーでした。10年目で子どもを授かった時に夫が浮気しました。悩みながら頑張った今度父が脳梗塞に。夫に内緒でギャンブルに行くようになり、

たかった。記憶をなくすことも多々ありました。就職して結婚した相手は、もう別れましたが、15歳上で特殊な職業でした。夫に認められなくて、頑張れば頑張るほど酒の量が増えました。夫の仕事関係で良くない事が起

根っこにはストレス 「病院に行こう」と夫 どうにか回復の途中 まずは助けを求めて

中野 当事者である森さんの話を聞いています。森 キャンブル依存症です。小さい時に母がいなかったため祖母に育てられ、どこへ行くにも子ども一人を置いてないという状態で一緒にパチンコにも行きました。ギャンブルを悪いと思わず、大人になってギャンブルに

中野 医療現場から話を聞かせてください。大野 依存症の方は医者や家族の問題もあって、困っている事を話さなければいけません。ただ、女性の集いで皆さんがよく話せるようになってきているのを見ると、自分と同じような境遇の方がいれば、孤独感が埋められて話しやすいのかもしれない。同じ立場の方と話す機会があるのは嬉しいです。



森 昭子氏(仮名)



坂本 優子氏(仮名)

基調講演

「『社会的人間』と『依存症』 ~ギャンブル依存症の理解の前に~」

医療法人志仁会 西脇病院 理事長・院長 西脇 健三郎氏

私たちの4人に1人が、うつや強い不安といった精神的な不調を経験しているのはなぜでしょうか。「ヒト、コト、モノ」という言葉があり、人類は人や物、さまざまな行為をよりどころとしながら進歩、発展してきました。しかし近年、それらへの指し加わりが過剰になり、物への執着が強くなり、物への執着であったり、賭け事

私たちが1人が、うつや強い不安といった精神的な不調を経験しているのはなぜでしょうか。「ヒト、コト、モノ」という言葉があり、人類は人や物、さまざまな行為をよりどころとしながら進歩、発展してきました。しかし近年、それらへの指し加わりが過剰になり、物への執着が強くなり、物への執着であったり、賭け事

依存の「見える化」が鍵

識が動くことも依存状態が長期化する大きな要因です。依存症が「否認の病」といわれるゆえです。そのためには、依存状態を客観的に見詰め、本人や家族が周りの「ずれ」が自覚するためのきっかけが必要で、家族や本人を支える自助グループに参加し、

助けてほしいと電話して入院しました。何げに行った自助グループの居心地が良く、酒をやめようと思っかけてになりました。居場所ができて自分と向き合うようになり、今はどうにか回復の途中です。

中野 医療現場から話を聞かせてください。大野 依存症の方は医者や家族の問題もあって、困っている事を話さなければいけません。ただ、女性の集いで皆さんがよく話せるようになってきているのを見ると、自分と同じような境遇の方がいれば、孤独感が埋められて話しやすいのかもしれない。同じ立場の方と話す機会があるのは嬉しいです。

対談 「依存症ー子どもから大人へ」 仲間や家族の支えが救い

グラフィながさ施設長 菅 公臣氏 × 長崎大名誉教授 花田 裕子氏

シンポジウムでは「依存症ー子どもから大人へ」をテーマに、長崎大名誉教授の花田裕子氏と、グラフィながさ施設長菅公臣氏による対談もあり、子どもの発達段階における依存防止対策などについて共有しました。

子どものメンタルサポート団体「一般社団法人シェアハート」代表理事も務める花田氏は、スマートフォンなどが身近にありゲーム依存などが憂慮。子どものグループで、ゲームの順番や時間を守らない子を「見守り隊長」に任命し、子ども同士でルールを運営することで自主性や規律が育まれトラブルが減った事例を紹介しました。

長年、パチンコ依存症に苦しんだという菅氏は、行き場のない中で「孤独だった」と振り返り、仲間や家族の支えに助けられたと説明。釣りやキャンプといった子ども向けの取り組みを挙げながら「つながり」を感じることで、大きな場が「一番大事なこと」と話しました。

主催/ギャンブル等依存症について考えるシンポジウム長崎実行委員会

【企画・制作】長崎新聞社メディアビジネス局